

静岡県産のツツジ属の種類とその分布

杉 本 順 一*

Note on the Species of *Rhododendron* (Ericaceae) and
Their Distribution in Shizuoka Prefecture

Junichi SUGIMOTO *

日本の花木の中で世界に誇るべきものは、サクラ類、ツバキ、およびツツジ類（シャクナゲ類）であると思う。これらの中でもツツジ類は近年全国的に観賞花木の王座になった事でもあり意義が深い。とくに静岡県の郷土の花にツツジが選ばれたことは静岡県人の関心が多いことを示している。

筆者は静岡県のツツジ属の分布および自生種の変異について永年にわたって興味を持ち、調査を続けて来た。その結果、静岡県にはツツジ属23種と若干の間種、変種および品種が自生することが明かとなり、それらの分布の概略も判明した。そこでここに得られた知見をまとめて報告したい。

Genus *Rhododendron* L. ツツジ属

ツツジ科の中で、その特徴として、花が漏斗状、鐘形又は輻状の合弁花冠を有し、やや左右相称を成して4〜7裂すること、葯は先端の小孔で開くこと、果実は先端から裂開することが、最も著しい。

ツツジ属の分布は北半球の寒帯と温帯にかけて多く、南アジアとニューギニアの高山にも及んでいる。とくに中国西南部からヒマラヤ地方に著しく分化して種類が多い。日本はこれに次いで割合に種類とその量が多く、45種を産する。

近似の *Tsusiophyllum* Maxim. ハコネコメツツジ属を合する学者（大井, 1953）がある、これは葯が縦裂する点で区別されるが、系統的にはごく近縁のものと思う。

本属は本県産のものを次の如く区別する。

- A 花序は枝に頂生する。葉は全縁。
 - B 葉は始め包旋する。葉裏に小腺球を生じ後鱗片と化す。……………ヒカゲツツジ亜属
 - B 葉は始め外旋する。腺球がない。
 - C 花は広鐘形で筒部が広い。葉は厚く大形。……………シャクナゲ亜属
 - C 花は漏斗形、ときに輻形（皿形）又は筒形。葉は薄い。厚味あるものは小形である。……………ツツジ亜属
 - D 花芽は葉芽と別の鱗片で包まれる。葉は薄くして一年生。……………レンゲツツジ節
 - D 花と葉は同一の芽に生ずる。
 - E 葉は一年生、通常3枚又は5枚づつ枝先に輪生する。毛は細い。……………ミツバツツジ節
 - E 葉は通常春と秋の2回出で、秋葉は通常越年する。毛は扁平の剛毛である。……………ヤマツツジ節
- A 花序は枝に側生する。葉は落葉性で細歯牙辺。……………バイカツツジ亜属

Subgenus *Lepidorrhodium* KOEHNE ヒカゲツツジ亜属

葉の下面、花梗などに腺球があるのが特徴。多くは常緑でシャクナゲ亜属に似たものが多く、少数は落葉性。北半球に広布し多くの種類がある。日本産3種、静岡県に次の1種がある。

1. *Rhododendron Keiskei* MIQUEL, Ann. Mus. Bot. Lugd.-Batav. II 163, 1866.

* 静岡市八幡5丁目。 5, Yawata, Shizuoka City.

ヒカゲツツジ (水谷, 1826) (1)

暖帯の山地岩壁などに生じる。屋久島では樹上に生ずるのを見る。葉は個体により広狭ありて、長楕円形から皮針形までで、シャクナゲよりも質がうすい。花は径3~4cmで淡黄色、2~6個づつ生じる。雄しべ10本。子房は腺点のみで毛はない。

静岡県の産地：伊豆では天城山脈の所々。東駿河では愛鷹山塊と毛無山脈に見るも富士山に見ない。西駿河では北は梅が島の裏山から低山にかけて所々に見る。遠江ではずっと奥地から南は小笠山に及び、北は大井川源流の井川に達する。標高900m以下。

分布：日本固有、関東北部から甲信、東海、近畿（各部）、四国、九州、コシキ島、屋久島を南限とする（原、金井、1958；倉田、1971）。花期4月。

Subgenus *Hymenanthes* ENDL. シャクナゲ亜属

高木又は大形低木となり、幹は分岐が少ない。葉は大きくて厚く、数年間生存する。葉下面に腺球を欠き、芽で外旋する。花と葉は同一の芽に生じる。花序は5~15花を散形又は散房状に生じ、中軸は短いか又は発達しないものが多い。花冠は広鐘形で5~7裂、雄しべは花弁片の2倍数ある。この亜属の種は中国からヒマラヤ地方に著しく多い。日本に亜種を入れ6種。静岡県産4種。

A 葉は長さ3~5cm、倒卵状楕円形で、下面は無毛、細脈は凹入して網状を呈する。花は淡黄色、花柱長さ15~20mm..... 2 キバナシャクナゲ

A 葉は長さ6~20cm、細脈は凹入しない。

B 葉は線形で幅1~2cm、下面に厚く綿毛があつて海綿状に密生する。花は紅色。..... 5 ホソバシャクナゲ

B 葉は狭長楕円形、幅2~5cm、下面は無毛又は微細毛だけ生ずる。

C 葉脚は急に切形又はやや凹形。花は径35~40mm、白色、淡桃色など。花柱は10~15mm。..... 3 ハクサンシャクナゲ

C 葉脚は尖る。花径4~5cm、淡紅色稀に白色。花柱は3cm内外。... 4 キョウマルシャクナゲ

2. *Rhododendron aureum* GEORGE, Bemerk Reise Russ. Reiche I 214, 1775.

R. chrysanthum PALLAS, Reise durch verschiedene Prov. des russischen Reiches III, append.

7. 729, t, f, 1~2, 1776. キバナシャクナゲ (杉山, 1900)

高山の地上に伏して生じ、高さ50cm以下、葉は厚くて表面は網状の細かい凹脈がある。下面は無毛。花は淡黄色で、落花直前にやや白く見えることがある。3~9個づつ生じ、径25~35mm、花柱は雄しべより長く15~20mm。

静岡県の産地：南アルプスの光岳以北の高山帯の荒岩原やガレ場ときにハイマツ林に混生する。決して森林帯には生えることがない。

分布：東部シベリヤ、カムチャツカ、千島各島、カラフト島、旧満州、北朝鮮。花期7~8月。なお台湾の高山に近似のニイタカシャクナゲ *R. pseudo-chrysanthum* HAYATAがある。

3. *Rhododendron brachycarpum* D. DON, Gard. Dict. III 843, 1834.

R. Fauriae FRANCH. Bull. Soc. Philom. Paris, ser. 7, tom. X. 143, 1886.

R. brachycarpum var. *roseum* KOIDZUMI, Bot. Mag. Tok. XXX 77, 1916. ウラゲハクサンシャクナゲ (武田, 1944), エゾシャクナゲ (中井 ex 原, 1936), フジシャクナゲ (富士山方言)

高さ2m以下の小低木、葉は狭楕円形で、葉脚が切形又はやや凹形で下面に微毛を密生する。静岡県に産するものは皆この形だけである。牧野標本館には長野県産のもので同一枝に若い葉裏が有毛で、二年目の葉裏が無毛となった、いわゆる中間形がある。従って、有毛品と無毛品は別種でないことが判る。

花柱が短かい点も特徴の一つ。花はキョウマルシャクナゲよりも小形で、花の色は変化が多く、色素がい

(1) 和名の命名者については白井 (1933) および原 (1948) に負うことが多い (以下同じ)。

ろいろ混生して、信濃駒が岳では赤、桃、白、淡黄、淡緑などを基とした不純色である。南アと富士山のものは淡紅色品が多く、白色品はまれである。隣地の八ヶ岳や木曾駒が岳には八重咲のものもあるが、本県にはまだ見つからない。

学名については問題がある。*R. brachycarpum* D. DON の原記載文はごく簡単に判りにくい上に、原標本が失われているので、中井(1927)と小泉(1930)はその学名を用いず、*R. Fauriae* FR. を起用した。大井(1965)は *R. brachycarpum* D. DON を復活して用いる。和名についても、白山に産するものは葉の無毛品であるから、有毛品 *var. roseum* について武田(1944)はウラゲハクサンシャクナゲの名を提唱した。

静岡県産地：南アルプスでは光岳以北の亜高山帯から森林限界あたりまで多い。標高2000~2600mに普通。

分布：北海道で釧路、十勝以南の各山岳、東北、関東、中部の高地に広く分布し、西は福井県三の峰に達する。佐渡にもある。国外では朝鮮のうつ陵島に分布。花期7月。

4. *Rhododendron Metternichii* SIEB. et ZUCC. Flora Japonica I. 23, 1835.

var. kyomaruense YAMAZAKI, Journ. Jap. Bot. XXXIX-1. 17, 1964. キョウマルシャクナゲ(山崎), アマギシャクナゲ(方言)

幹は直生して5mに達し、葉は狭長楕円形で、基部は尖り、下面に微毛を密生している。花冠は5裂するが、天城山に6~7裂を混ざる個体もあった。信州西駒岳のホンシャクナゲ *R. Metternichii* *var. hondoense* NAKAI はときに花冠が7裂する個体があり、花冠が5裂と7裂で機械的に別種とする考えは疑問である。

本種はもとアズマシャクナゲ *R. Degronianum* CARR. = *R. Metternichii* subsp. *pentamerum* (MAXIM.) SUGIMOTO⁽¹⁾ と同種とされていたが、葉裏の毛の検鏡的形態で別物と見做された。しかしアズマシャクナゲと非常によく似ていて、幹が高く立ち、東北地方や北関東や長野県に多いものと違うとも同じとも今の所よく判りかねる。

静岡県産地：伊豆半島では天城山脈の尾根の北側に列生する。南限は猿山と長九郎山に及び標高500~1400m。駿河には見つからない。遠江では常光寺山、千頭国有林の板取山の西面の石南花段、春野町京丸山の北面に群生する。京丸の牡丹の伝説に名高い岩岳山には今は見ない。不動岳にもあるという。

分布：長野県下伊那郡に数か所自生する。日本固有種、このような分布形を東海道要素と名付ける。

(a) f. *albens* SUGIMOTO, New Keys of Japanese Trees, Rev. 475, 1965. シロバナキョウマルシャクナゲ(杉本) 花が始めから純白のもの。天城山に稀生する。

5. *Rhododendron Makinoi* TAGG. ex NAKAI, Trees and Shrubs Indigen. Jap. proper, 61, 1927.

R. stenophyllum (non HOOK. 1877) MAKINO, Bot. Mag. Tok. XVI, 33, 1902.

ホソバシャクナゲ(牧野, 1896) エンシュウシャクナゲ(方言)

主幹は2~3本直立し、高さ5mに達する。葉は特に細長くして、下面に厚い綿毛を密生する。花序は7~13花をつけ、淡紅色、苞は開花時にも宿存している。雄しべ10本。花は落花する頃もあまり退色しない。ヤクシマシャクナゲ *R. yakushmanum* NAKAI のような綿毛があるが、彼はつぼみでは赤味が多きも、開くに従って退色するし、苞も早脱するので違っている。

静岡県産地：遠江西部の天竜川、阿多古川および大千瀬川に囲まれた山地にのみ生じ、(杉本, 1973) 今残っている所は、佐久間町浦川吉沢と、竜山の二ヶ所である。以前には白倉に沢山あったというが荒されてしまった。秋葉山の奥には無く、中井(1922)のは栽培したのによったかであろう。海拔400~800mの三波川系の結晶片岩の弱酸性地域の尾根に多く群生し、マルミゴヨウ、ソヨゴ、クロソヨゴ、コアブラツツジ、ネジキ、ケナガウスギョウラクなどと混生し、この地帯にはシダ類を見ない。

(1) 杉本, 1961; 山崎, 1964

(2) 京丸の牡丹の正体は牧野(1924)の説の如くホオノキが適当で、本種とは思われない。

県外の分布：愛知県東部だけに分布し、鳳来寺町、東栄町、設楽町および津具村に産す。

古く白花品、車咲品および八重咲品が名古屋の村井時哉氏（故人）の庭で見たことがあり、氏の著書⁽¹⁾に出ているが、今は見ない。

付1. *Rhododendron* × *niko-montanum* NAKAI, Bot. Mag. Tok. XXXI, 242, 1917, XLI, 503, 1927. *R. aureum* × *R. Fauriae* var. *roseum* ニッコウキバナシャクナゲ（中井）ナンタイシャクナゲ（杉本, 1936）

キバナシャクナゲとウラゲハクサンシャクナゲとの自然間種。小松春三氏が栃木県女峯山と男体山で採集した。

静岡県の産地：南アルプスの本谷山（杉本, 1925採）に稀生。

県外の分布：栃木県日光山脈、長野県西駒岳。

Subgenus *Anthodendron* ENDL. ツツジ亜属

一般に *Azalea* としたものの大部分である。形態は変化が多く共通の特徴とって見ない。葉は小形又は薄いものであって、腺球はない。花は漏斗形のもの多く、ときに筒状、輻状などのこともある。若葉は外旋である。分布は中国に最も多い。東亜、北米に広く分布している。日本では全国に分布し小笠原と八重山にも産する。静岡県に産するものを次の3節に分ける。

Sect. *Tsutsusi* SWEET ヤマツツジ節

この節のものは葉が通常互生し、春と秋2回に発生して秋のものは通常越年する。しかし同一種でも暖い所のものは常緑性となり、温帯以上の山地のものは落葉性となり易い。毛が巾広い偏平で本当の毛状でないのも特徴である、本県に7種見る。

- A 花は小形で径2 cm以下、葉長2 cm以下。
 - B 花冠は盆形で内面に毛がある。白色。
 - C 葉の下面はほとんど無毛、花冠5裂して、雄しべ5本、雄しべの葯は縦に裂開する。……………13 ハコネコメツツジ
 - C 葉の下面に毛をまばらにつける。花冠4裂し雄しべ4本。葯は頂で丸い小孔で開く。……………12 チョウジコメツツジ
 - B 花冠は漏斗形で5裂し、淡紅色。花筒の内面に毛がない。雄しべ5本。葉の下面はほとんど無毛。……………10 ウンゼンツツジ
- A 花は大きく径5 cm以上。
 - B 萼片は線状皮針形から皮針形、長さ8～30 mm、雄しべ5本。
 - C 萼片は線状皮針形、長さ2～3 cm、著しい腺毛があつて強く粘る。花は淡紫色。7 モチツツジ
 - C 萼片は短皮針形～皮針形、長さ8～14 mm、あまり粘らない。花は淡紫紅色。……………（付1）ミヤコツツジ
 - B 萼片は短小、長さ8 mm以下、粘らない。
 - C 雄しべ7～10本。
 - D 葉は小形皮針形、長さ2～3 cm、花は紅紫色、径20～30 mm、花期5月下～6月、……………9 アシタカツツジ
 - D 葉は長さ3～5 cm、花は大形、赤色、径5～6 cm、花期4月。……………11 オオヤマツツジ
 - C 雄しべ5本、花径4～5 cm 赤色。
 - D 葉は広皮針形で尖り、常緑、幅5～9 mm、花は春葉の伸長後に開き1個（まれ2個）つつ生ずる。……………6 サツキツツジ
 - D 葉は広楕円形又は長楕円形で、秋葉は春葉より小形、多くは落葉又は半落葉性、花は2～3個つつ（まれに1個又は4個）つく。早咲。

(1) 村野時哉, 村野山草写真集 1946.

E 葉は薄くて大部分又は全部落葉する。苞は小形。…………… 8 ヤマトツジ

E 葉は厚くて秋葉は越年する。苞は大形。…………… 8 (変種) オオシマトツジ

6. *Rhododendron indicum* (L.) SWEET, Brit. Fl. Gard. ser. 2, II sub.t. 128 (変種) 8, 1833.

R. lateritium (LINDL.) PLANCH. Fl. Serres IX 80, 1853. サツキツツジ (古名), サツキ (一般名)

常緑性で著しく多幹を簇生し、著しく小枝を密生する。屋久島では高さ5~6mの大木を見る。本県の自生地では小形で1m以下のもの多く、かえって庭に植えたものに大きい株がある。たとえば静岡市用宗の竹内氏庭のものは周囲10m余高さ3mの大サツキである。葉は小形の広皮針~皮針形で両端尖り、常緑性。この性質は河岸で増水しても水の抵抗に耐える利がある。花は通常1個で赤色で変異は野生では見ない。雄しべ5本で葯は暗紫色の点はヤマトツジと異なる。花は葉が開き終った後に開く点も特徴である。ツツジ類中ではアシタカツツジと共に遅く咲くもので、大井川源流では7月まで花を見ることがある。園芸品は著しく改良されて品種が多いが、近年はキメラ品、すなわち同一株で花色の変ったものが混ざるのが多く見られる。もう一つ注意すべき点は園芸上サツキと称するものの中にも、他種のマルバサツキ或はそれとの雑種も含まれ、純粋のサツキの品種ばかりでない。サツキの学名に *R. indicum* を用いるが、古い時代のヨーロッパ人の行った事であるから、日本とインドをまちがえた事であり、インドに自生は無い。花期5月~6月。

静岡県の産地：伊豆には見ない。東駿河では判らなかったが近年になって富士宮市井の頭の谷川に少し自生が判った。富士川に見ない。安倍川本流に無く、支流のわら科川の一部に僅かみる。大井川は最も豊富で、各支流と共に深く上流に達していて、東岳の麓に達している。天竜川でも支流の阿多古川、大千瀬川と共に多く、長野県南部にさか上っている。

種の分布：日本固有、北限は大体静岡県であろう。東京都飯尾のものは明かに自生でない。東海道、長野県南、西部、福井県から近畿地方に達する。紀伊半島では多いが、北近畿では稀少で、兵庫県が西限である。中国地方と四国ではキシツツジ *R. ripense* MAKINO と交代してサツキを欠く事は(山中、竹崎、1959)植物地理学上、興味が多い。九州では熊本県(球摩川地方)と宮崎県の方に生じ、種子島に見ないが、飛んで屋久島に著しく多産する。屋久島のものは木が大きくなり葉が細いが、花は本州のものと同じ。琉球久米島の報告(牧野、根本、1914)も何かのまちがいで琉球に自生は見ない。

7. *Rhododendron macrosepalum* MAXIM., Gartenflora, XIX, 258, t. 662, 1870.

R. linearifolium SIEB. et ZUCC. var. *macrosepalum* (MAXIM.) MAKINO, Bot. Mag. Tok. XX VII 108: 1913.

モチツツジ⁽¹⁾ ネバツツジ⁽²⁾ ムラサキツツジ(駿遠方言)、ムシトリツツジ(伊豆方言)、ネンバリツツジ(静岡方言)、ネバルツツジ(同)

半常緑低木で多幹性、高さ4mに達する。全体に長毛を多生する。春葉は大きくて軟らかく、光沢がない、秋葉は小形で狭い。花は径4.5~5.5cm、淡紫色、浅い漏斗形。萼片は狭皮針形で邦産中一番細長くて、腺毛が多くて、花梗と共に粘質が多い。雄しべ5本。

静岡県の産地：牧野線すなわち富士川を越して伊豆の西岸や、愛鷹山西麓に侵入している。富士川以西では深山から沿岸地方の丘陵地まで広く分布し、とくにアカマツ林に多く、有度山、小笠山、三方原などは大群生地であったが近年の開発で少くなりつつある。北限は梅が島温泉や井川あたり迄達する。また富士地方では渡辺健二氏によると愛鷹山西麓の外に小山町小木原に及ぶという。標高800m以下が分布圏である。

種の分布：日本固有。北は山梨県身延山や早川の奥の奈良田あたりまで達し(植松、1958)長野では下伊那郡と木曽郡に及ぶ(杉本、1964)。岐阜県、福井県佐分利、近畿地方、中国地方(日本海側を除く)に、四国は東半部に分布する。花期4~5月、中井(1949)は遠江小笠山で次の2品種を報告した。

(a) f. *micranthum* NAKAI, Bull. Nation. Mus, Tok. no. 27, 33, 1949. コリンモチツツジ(中井). 花は小形で径および長さ30~35mm.

(b) f. *subrhodorhoides* NAKAI, l. c. ハナコチョウ(中井)

(1)紀南六郡誌, (2)草本名寄; (1), (2)共に著者及び年代未確認。

花冠がやや深く5裂して裂片の狭い形のもの。上位の内面に濃紫斑がある。

以上の外に花が皿形に開く一形、ヒラザキモチツツジ(杉本, 1967)が遠江小笠山で採集された。

園芸品で静岡県下の地名のついたスルガマンヨウ cv. *Surugamanyo* (山崎他, 1969)は葉巾狭く縁が下へ捲かれて表面にしわがあり、花は万重咲きで紅紫色、子房は弁化して緑色を呈する。江戸時代に駿河あたりで産したもの。

8. *Rhododendron obtusum* (LINDL.) PLANCH. *Flore de Serres* IX, 80, 1853. var. *Kaempferi* (PLANCH.) WILSON, *Monogr. Azal.* 38, 1921. *R. Kaempferi* PLANCH. I. c. 77, 1853. ヤマツツジ(古名)・ヒエウエツツジ(方言)・チスジ(方言)

最も普通のツツジで、普通二次林や丘陵地に多いものは高さ1 m内外の低木。キリシマツツジよりも枝はよく伸長し分岐も疎である。筆者は天城山の八丁池路で高さ6 m、幹囲1 mぐらいの単幹の高木を見たことがある。葉は二形ありて、春葉は大きくて薄く、扁平毛をまばらに伏生する、概ね秋落葉する。個体変異が多く、広いは広倒卵形又は広楕円形で普通形は長楕円形、まれに皮針形のものもある。光沢は少ない。花は2~3つづつき朱赤色で径4~5 cm、大小や色の濃淡、萼形なども変化が多い。萼は毛が多いが粘毛はない。雄しべ5本で、葯は黄色。赤色のものや暗紫色のものはヤマツツジの基本のものと違う。

静岡県の産地: 至る所の山地や丘陵又は山原に多い。とくに二次林で、アカマツを主木として、ツツジ科、ネズ属、ネザサ類などの植生地に多い。伊豆東岸の大室山や小室山とその周辺、中部では有度山、西部では小笠山、三方原、湖西山脈に多い、近年開発のため大分少なくなったが、県下のツツジ類中で最も多いもの。北は大井川源流に及ぶ。

変種の分布: 日本固有。北海道では日高および札幌以南、本州の全域、四国および九州、南限は種子島までである。屋久島以南に見ない(初島, 1971)。花期低地4月、温帯5月に及ぶ。

ヤマツツジは変異が多く、その上近似種とよく雑種を生じる。よって学名も独立説(原, 1948)と、種の範囲を大きく見る説(北村, 村田, 1971)とあり、学者によって見解の相違はあるが、双方の説とも正当性があり、筆者は後者の見解に従った。

静岡県下に次のような品種が知られる。

(a) f. *albiflorum* WILSON, *Monogr. Azal.* 41, 1921, シロヤマツツジ 花の純白色の品、伊豆天城山と愛鷹山で見つかったが、駿遠各地にまだ自生があると思う。

(b) f. *zonale* NAKAI, *Bull. Nation. Sci. Mus. Tokyo.* XX VII: 33, 1949 アカスジヤマツツジ(中井) 花は白色で赤条があり、駿河岩崎に野生、

(c) f. *mikawanum* (MAKINO) WILSON, I. c. 43, 1921. ムラサキヤマツツジ(牧野, 1909) 花は紫色のもの、遠江の山野にヤマツツジに混じて、稀でない。ミヤコツツジ *R. tectum* KOIDZ. (モチツツジとヤマツツジの間種)よりも違って、萼片が短かく、粘質が全く無い。タイプ産地愛知県三河地方に多く、南信から東海道にも多いものである。

以上の外にエゾヤマツツジ f. *latisepalum* (NAKAI) MAKINO, *Ill. Fl. Nipp.* 255, 1940. に当ると思うものが大井川原流で採集されているが、中間品があるようである。

また葯が紫色で葉に光沢のあるもので、テリハヤマツツジ *R. Kaempferi* var. *lusidusculum* (NAKAI) SUGIMOTO, *Journ. Geobot.* XX 11—4 51, 1975. *R. lusidusculum* NAKAI, *Tr. Shr. Indig. Jap. prop.* I, 1922, et *Bot. Mag. Tok.* XXX VIII, 28, 1924. に該当すると考えられるものを静岡市で採集した。しかし後者2品については尚後考を要する。

var. *macrogemma* (NAKAI) KITAM. in KITAMURA et MURATA, *Col. Ill. Woody pl. of Japan* I. 164, 1971.

R. Kaempferi PLANCH. var. *macrogemma* NAKAI, *Bot. Mag. Tok.* XXX VIII, 28, 1924. オオシマツツジ(中井, 1922)

ヤマツツジに似て葉は厚く光沢があつて、秋葉は越年性、芽鱗が大きい。

静岡県の産地、伊豆半島南部沿岸は産す。

分布：伊豆七島中、御蔵、三宅、神津、式根、新島、大島および神奈川県真鶴岬 (MAKINO)

9. *Rhododendron Komiyamae* MAKINO, Journ. Jap. Bot. III, 17, 1926. ⁽¹⁾

R. surugaense SUGIMOTO, ⁽²⁾ ex KURATA, Ill. Imp. For. Tr. Jap. IV, pl. 37—182, 1973.

アシタカツツジ (杉本, 1925)

葉と花は小形であるが、木としては日本ツツジ属中で最大となる。愛鷹山のブナ林中には高さ10m、幹囲1m以上の巨大のものが自生する。しかし二次林や原野では高さ1m内外の低木として多数群生する。葉は小形でサツキと同形で質は薄くて落葉性で、長さ約2~3cm、幅約1cm内外。花は小形で各芽に1~3個づつつ着き、紅紫色で径20~30mm、雄しべは普通7本であるが、6本から9本までの変異がある(渡辺, 1950)。10本を数えたという人もあるがごく稀であろう。花期がおそくて、5月下旬から6月中旬に咲き、咲き残りの花は山の高い所では7月に見たこともある。

静岡県の産地：日本はもちろん、静岡県固有種で、富士山の南及び西側だけに見る。極めて分布が狭く、フオッサマグナ要素の一つである。愛鷹山では中腹以上に多く、北側では十里木あたりにもある。富士山南側の十里木の北方に生えている。もう一つの集団地は天子岳とその麓の田貫湖周辺に多い。標高500~1,500mに生ずる。

本種は他の近縁種とよく交配することと、花期がおそい点を利用して、他のツツジ類、たとえばキリシマツツジなどと交配育種すればおそ咲品種となり、長い花期が見られるであろう。

10. *Rhododendron serpyllifolium* (A. GRAY) MIQUEL, Ann. Mus. Lugd.-Bat. II, 165, 1866.
ウンゼンツツジ (岩崎, 1828)^(a) コメツツジ (伊豆方言)

通常高さ50cmぐらいの小低木で簇生して枝が細くて密に分岐する。湿度が高くコケの生える場所では主な枝が地に接すると不定根を出している。葉は小形でコメツツジより薄く、長楕円形から倒皮針形ときに倒卵長楕円形と変異があるが、長さ5~15mm、幅1cm内外、下面はほとんど無毛で中肋だけまばらに伏毛がある。花は各芽に1個づつ出で、小形淡桃色で(伊豆産)、径15mmぐらい。雄しべ5本で花柱と共に花より外へ突き出ている。花冠には毛がない。花期4~5月。

静岡県の産地：伊豆半島だけに見る。標高500~700mの山地の岩壁や土壁の場所に群生する。北は修善寺、土肥あたりから南は松崎町あたりまで多く、主として西側に産し、東側では殆んど見ない。中央部では天城峠あたりを見る。駿河遠江地域では見ない。

種の分布：日本固有種、紀伊半島に飛び、山陽地方、四国東部、九州の大隅半島に隔生する。牧野標本館には千葉県清澄山産(牧野富太郎採集, 1930年)の標本がある。このように隔離分布する。ソハヤキ要素である。

琉球にも報告(松村, 1912)があるが、まちがいである(初島, 1971)。

(a) f. *amagianum* HAYASHI, Bull. Gov. For. Exp. 170 : 81, 1968. アマギウンゼンツツジ(林)
「葉は広倒皮針形、花は白紅色、花糸と葯は紅色」(林)伊豆半島天城山産。

(b) f. *albiflorum* (MAK.) HARA, Enum. Sperm. Jap. I : 53, 1948. シロバナウンゼンツツジ(牧

(1) *R. Komiyamae* MAKINO の学名は御殿場市の竹販売業小宮山富太郎が1925年愛鷹山で採集して箱根の沢田武太郎を介して牧野博士が命名。但し Three plants of New to Japan なる書物は現存しない事が確認された。

(2) 著者は同年同山で採集し英文で発表した(1925)。しかし命名規約上有効として採用する学者と無効とする人とある。

(3) 牧野富太郎博士が植物研究雑誌1巻7号172(1917)において「きりしまつつじ霧島山に無くうんぜんつつじ温泉岳に産せず」の項で詳記ある如く、ウンゼンとは温泉岳のことであるが、その山に産しない。ウンゼンツツジはもとミヤマキリシマを指したものである。熊野物産初志でそれと区別するためクマノウンゼンと命じたのが、略されてウンゼンツツジとなった。

野1908) 花が純白色のもの。

静岡県では天城山城で黒鳥氏が採集した(林, 1952)。ごく稀品であろう。

11. *Rhododendron transiens* NAKAI, Tr. & Shr. ed. 1, 103, 1922—Bot. Mag. Tok. XXXVIII. 29 (1924). オオヤマツツジ (中井, 1922)・ミカワムラサキ (花戸)

ヤマツツジによく似ているもので、夏の葉は大きい長楕円形、萼片も少し長く、花が大きく、野生品では朱赤色、雄しべは6~10本ある。原(1948)はたぶんヤマツツジとオオムラサキツツジ *R. Oomurasaki* MAKINO との雑種と述べている。

静岡県の産地：筆者は伊豆函南町、静岡市、遠江、浜松市などで採集したことがある。野生と見られるもので自然のアカツ林に生えていた。

分布：天然分布は少なく、武蔵、相模、南信、美濃、山城、摂津、紀伊、美作、備中、周防、四国などの報告を知るが、どれが天生で、どれが逸出か或は栽培品かはよく判らない。

野生のヤマツツジに庭に栽培するオオムラサキツツジの花粉が自然に掛って雑種となったと思う。園芸品には若干の品種があり、アスカガワ系とミカワムラサキ系が含まれる。野生品から改良されたか或はまた人工交配して造られたかよく判らない。牧野標本館の標本に次のものがある。百沢(大正14年)、東京大泉栽(1935)、原村浄林寺山(明治35年)、武蔵城郷村(1915)、武蔵飯尾(1915)。

12. *Rhododendron tetramerum* (MAKINO,) NAKAI, Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo 31, 1952, —TAKAHASHI, H. Bull. Kanagawa Pref. Mus. 8, 107, 1975,

R. Tschonoskii Maxim. var. *tetramerum* (MAKINO) KOMATSU, Bot. Mag. Tok. XXXII, (15) 1918. チョウジコメツツジ (小松, 1918)

ごく最近までコメツツジ *R. Tschonoskii* Maxim. と同種又は変種と見なされ、慢然機械的に花冠4裂するものが混同されていた。しかし高橋秀男氏は別種説を提唱し、中井博士の組合せを学名に採用している。私もかねて別種説を提唱したことがあるが賛成を得られなかった。コメツツジは花冠が5裂品と4裂品と2形があり、その4裂品とチョウジコメツツジとを混同したのが、そもその混雑の由来であると思う。花期7月。高橋(1975)による区別は次の如くである。

チョウジコメツツジ：葉の毛は表面よりも裏面の方が稀生、花冠は4裂し筒鐘形で、裂片は筒部よりも短い。雄しべは花冠に同長か微かに長め。葯長0.8~1.0mm、花柱長2.5~3.5mm、亜高山帯上部から高山帯に分布。

コメツツジ：葉は両面とも長伏毛がある。花冠は筒状漏斗形、裂片4又は5で筒部より明かに長い。雄しべは花冠よりはるかに長く外へ突き出ている。葯長1.5~2.5mm、花柱長6.5~13mm。温帯上部から亜高山帯の間に分布、長野県では秩父山脈から浅間火山脈に分布。樹形や葉形はハコネコメツツジと全く同じで、ただ葉の性質と花が異なる。通常高さ30~50cmぐらいで、大きくても1mを出ない。花は白色で内面に毛がある。

静岡県の産地：南アルプスの全山に産し、梅ヶ島の山地、北遠の白倉山、水窪の奥などに達し、標高2,000m以上に多い。富士山には見ない。静岡県にコメツツジは見ない。

種の分布：南アルプスに多く、コメツツジを欠き全部本種である。戸隠山、北アルプス各山、御岳、木曾駒岳、高森山、美が原、八ヶ岳山脈、など長野県の高山の大部分に分布する。ハコネコメツツジと混同し誤られることがある。

13. *Rhododendron Tsusiophyllum* SUGIMOTO, Journ. Jap. Bot. XXXI, 64, 1956.—OHWI, Fl. Jap. ed. 2, 1026, 1965, *Tsusiophyllum Tanakae* MAXIM. Rhodod. As. Or. 12, t. 3, f. 1~8, 1870, ハコネコメツツジ (牧野) コメツツジ (方言)

本種は幹が多く簇生し枝も著しく密生し、葉も小形で落葉性で、花は小さく筒状を呈するなどの特徴をもち、外見上は大変よくチョウジコメツツジに似ている。しかしハコネコメツツジは葉裏に少し毛があり、葯が縦裂することで後者と区別される。花期7月~8月上旬。

多くの学者は本種を別属 *Tsusiophyllum* MAXIM. *Rhododendron*, As. Or. 12, 1870. として区別し

ている。しかし分布区域が狭い点を考えると系統的に古いものとは考えられない。本種をツツジ属に入れる学者もあるので、筆者もツツジ属へ加えて述べた。

静岡県の産地：富士川以東に限られ、以西に見ない。伊豆では天城山の主峰と遠笠山の頂部の断崖に少し見る。愛鷹山では鋸岳の断崖に生じ、金時山頂に僅か残っている。毛無山の頂上にも見つかる。牧野標本館には牧野博士（1916）採集の富士山産標本があるが、その後富士山で見ない。

種の分布：伊豆諸島（神津、三宅、御蔵の各島）、上野多野郡上野村の山地⁽¹⁾ 武蔵（八日見山、両神山、甲武信岳、高平雁坂峠の間、十文字峠）、相模（駒岳、双子山、金時山、丹波山）、甲斐（十文字峠、甲武信岳、三峠山、御坂山脈）で大体フォッサマグナ地域（前川、1949）に限られている⁽²⁾。

ツツジ節の雑種

（付1）*Rhododendron* × *tectum* KOIDUMI, Bot. Mag. Tok. XXXVII, 38, 1923. *R. Kaempferi* × *R. macrosepalum* ミヤコツツジ（小泉）⁽²⁾

ヤマツツジとモチツツジの雑種であることは学者間一致の見解である。ヤマツツジとモチツツジが混生する地域にのみ生ずる。

ヤマツツジに比して葉の毛が長く多い。花は紅紫色で両者の中間色を呈する。最も顕著の特徴は萼片が少し長く鋭頭である事。またモチツツジに比して葉の毛の状態が少なく、花色に赤味がかかった紫となり、萼片が短かい点に差がある。花梗と萼はほとんど粘らないか僅かの腺毛を混ずるだけである。

静岡県の産地：東駿河では芝川町稲子だけ。西駿河では各地に点在し、北は梅ヶ島温泉上、南は有度山や丸子まで。遠江では広く点在し北は京丸や秋葉山から南は小笠山、三方原および湖西山脈で採集又は見ている。花期4月。

分布：モチツツジの分布圏に広く混生し、東海道、近畿、山陽、四国に及ぶ。

牧野標本館には摂津六甲山（牧野1922, 1934, 1935, 1938, 枚数多量）、紀伊東富田（1917）、紀伊高野山（1913）、駿河丸子（鶴田章逸, 1911）の標本がある。

（付、2）*Rhododendron* × *ashitakayamense* SUGIMOTO, Journ. Geobot. XXII-4, 53, 1975. *R. Kaempferi* × *R. Komiyamae* スルガヤマツツジ（杉本, 1962）

アシタカツツジとヤマツツジと2種が混生する所に生じ、明かに両種の雑種と思う。

花の大きさと色、葉の形と質は全く両者の中間形を呈する。葉はほうすい長楕円形、長さ2～4 cm、幅8～15 mm、花は各芽に2～4づつ着き、花冠径3 cm、赤味勝の赤紫色、雄しべ5本。葯は黄色。

静岡県の産地：筆者は裾野市十里木および愛鷹山、田貫湖の傍で採集した。現地で両母種と比較して一見判別できる。

日本及び本県固有。花期5月下旬。

Sect. *Sinenses* NAKAI レンゲツツジ節

幼条、葉、花柄などの毛は細長くて、扁平ではない。葉は互生するか又は輪生する。一年生。腺球がない。花芽は頂生し、葉芽と別の鱗片に包まれる。漏斗形又は皿形。本節には県下にレンゲツツジ、アカヤシオの2種が属し、それらの区別点は下のようである。

- A 葉は互生、辺毛は短小。花芽中に2～8花を生じ、花は赤色で漏斗形、裂片は長楕円形。雄しべ5本、子房は有毛。……………14 レンゲツツジ
- A 葉は5枚づつ輪生、辺毛は長い。花は葉に先ちて開き、1～2づつ生じ、皿形で、裂片は円形で凹頭。淡桃色。雄しべ10本。子房は無毛。……………15 アカヤシオ

14. *Rhododendron japonicum* A. (GRAY) SURINGAR, Gartenfl. LVII, 517, 1908.

R. glabrifolius (REGEL) NAKAI, Tr. & Shr. ed, 1. 64, 1922. レンゲツツジ（貝原, 1708）

(1) 里見哲夫氏の書状

(2) 和名は京都大文字山（小泉, 1920）産に都の意味でつけられた。

ヤツブサ (駿東)⁽¹⁾ オオヤマツツジ (同), ヤツツジ (同)

落葉低木, 高さ 2 m に達する。多幹性で分岐はやや疎, 葉は互生し倒皮針状長楕円形で鋸頭で楔脚, 微辺毛あり, 下面脈上細毛がある。花は每芽中 5 ~ 15 づつ生じ, 大形漏斗形で長さ 6 ~ 7 cm, 筒部は縦溝がある。雄しべ 5 本で花糸は有毛。子房は有毛。花が大きくて多いので群生すると美事である。朱赤色のものが多いが, まれに橙色 (カバレンゲ) や黄色 (キレンゲ) がある。

静岡県の産地: 富士山周辺の山麓に著しく多く群生する。須走や朝霧高原などに多い。北遠地方の信州界の山にも少し生ずる。

種の分布: 日本固有, 北海道は渡島半島, 本州は大部分, 四国, 九州 (肥後以北), とくに火山地帯に多い。日当りを好み, 日影になると劣える。また酸性地に適している。

(a) f. *glaucophyllum* (NAKAI) HARA, Enum. Sperm. Jap. 1, 36, 1948. ウラジロレンゲツツジ 葉裏に臘分が分泌して粉白のもの。各地に混在し, 干いた所には多い。

(b) f. *flavum* (MIYOSHI) NAKAI, Tr. & Shr. Jap. ed. 82, 1927. キレンゲツツジ (花戸 ex 三好, 1921) キツツジ (方言) 花の黄色のもの。

静岡県の産地: 富士山麓にごく稀に自生。

15. *Rhododendron pentaphyllum* MAXIM. ⁽²⁾ Bull. Acad. Imp. Sci. St.-Pet. XXXI, 65, 1886. var. *nikoense* KOMATSU, in MATSUM. Ic. Pl. Koishikav. III. 45, Pl. 168, 1916.

R. nikoense (KOMATSU) NAKAI, Tr. & Shr. Jap. ed. 1. 68, 1922. アカヤシオ (小松), アカギツツジ (関東), チョウチンツツジ (遠江方言)

落葉低木, 高さ 5 m ぐらい。葉は 5 枚づつ枝先に輪生し, 広楕円形で先端は鈍形で微尖端あり, 辺に長い開出剛毛を列生する。頂芽には針状の鱗片がない。花は葉の開く前に開き, 每芽 1 又 2 花づつで皿形, 5 裂し, 筒部は浅く, 裂片は少し凹頂。雄しべ 10 本, 花糸に毛があり, 花梗に腺毛があるので母種のアケボノツツジと異なる。

静岡県の産地: 東部では金時山の尾根だけに見る。遠江では北部の 600 ~ 1,500 m の尾根や谷川の岩地に生じ, とくに春野町の岩岳山の上部に多い。伊豆に見ない。

県外の分布: アカヤシオは北は磐城, 関東 (下野, 上野, 常陸, 武蔵, 相模), 東海 (南信, 遠江, 三河, 美濃), 南畿 (伊勢, 播磨), とんで九州東南部に生じる (倉田, 1971)。

母種アケボノツツジは紀伊, 四国, 九州南部に産す。花期は 4 月 ~ 5 月上旬。

遠江岩岳山の群生地は国の天然記念物に指定された。

Sect. *Sciadorhodion* REHD, et WILSON ミツバツツジ節

落葉低木。たぶん常緑性のサクラツツジ *R. Tashiroi* MAXIM. (静岡県に無い) もこの節のものと思う。葉は枝先に 3 枚又は 5 枚づつ輪生する。しかし長枝では葉がまばらに互生することがある。花は混芽の中に葉芽と共に生ずる。

A 葉は枝先に 5 枚づつ輪生。花は白色。……………16 ゴヨウツツジ (シロヤシオ)

A 葉は枝先に 3 枚づつ輪生。花は通常紫色ときに赤色又は白色。

B 葉は光沢があって, 幅 3 ~ 7 cm, 下面中肋に密生毛がある。葉柄は 5 ~ 10 mm, 花は葉におくれて開く。径 5 ~ 6 cm, 雄蕊 (7) ~ 10 本。

C 花はピンク色で 5 ~ 6 月開く。花梗長さ 5 ~ 8 mm. ……………22 ジングウツツジ

C 花は赤色で 6 月下旬 ~ 7 月上旬開く。花梗長さ 6 ~ 13 mm. ……………21 アマギツツジ

B 葉は光沢がなく幅 2 ~ 5 cm, 葉柄は 2 ~ 12 mm, 花は紅紫色で通常葉に先立って開き, 径 3 ~ 4 cm,

C 雄蕊 5 本, 子房は毛なく短腺毛がある。葉柄と葉は後無毛となる。……………17 ミツバツツジ

(1) ヤツブサの方言は花序の花が多い故。

(2) 母種名はアケボノツツジ, 静岡県に無い。

C 雄蕊(7)~10本。子房は密生毛がある。

D 葉柄と花梗は全体に毛がある。

E 葉柄と葉の下面中肋下方に密生毛がある。花柱に腺毛がある。 20 トウゴクミツバツツジ

E 葉柄は初め少し毛あるも後にはほとんど毛がなくなる。花柱は無毛又は少し毛(腺がない)がある。.....19 コバノミツバツツジ

D 葉柄と葉は無毛となる。花梗は下部を除いて無毛、萼の背面は無毛。.....18 キヨスミツバツツジ

16. *Rhododendron quinquefolium* BISSET et MOORE, Journ. Bot. XV, 292, 1877.

ゴヨウツツジ(水谷, 1826) シロヤシオツツジ(松村, 1900)

落葉低木、高さ6mに達する。葉は枝先に5枚づつ輪生し、倒卵形で両端尖り、微縁毛がある。葉柄は1~2mm無毛。芽は外側に針状の鱗片がある。花は各芽に1~2花づつ出て白色、漏斗状で径3.5~4cm。裂片は楕円形で先は鈍く尖り気味、雄しべは10本、子房は裸。

静岡県の産地: 温帯山地のブナ、カエデ林の下に生じ、標高700~1,500mに稀でない。伊豆では見ない。東駿では金時山、天子岳の山脈の尾根に生ずる。安倍奥では八紘嶺から大川の山奥に及ぶ、遠江では水窪山地一帯から秋葉山、瀬尻山あたりに達する。

種の分布: 日本固有、北は陸中南端部以南の多くは外帯山地に多く、西は摂津、伊勢大杉谷に及ぶ、四国では中央山脈の上部にみる。花期4月末から5月。

17. *Rhododendron dilatatum* MIQUEL, Ann. Mus. Lugd.-Batav. I, 34, 1863.

ミツバツツジ(牧野, 1893), ⁽¹⁾ ミヤマツツジ(方言, 近似種の総称)

本種以下20まで全部は、みな葉が枝先に輪生する。また数個の細い幹が立ち、枝は3岐性。落葉低木。ミツバツツジは全体無毛となる。葉柄、花梗、葉など無毛。幹は高さ4mぐらいに達する。花は葉に先だって開き紅紫色、各芽中に1~3花づつ出る。径3~4cm、花柱は無毛。雄しべ5本が特徴。子房は毛なく、短腺毛を密生する。

静岡県の産地: 暖帯から温帯の山地および丘陵に広く分布する普通種、花期4月。

種の分布: 関東、東海、南信、近畿の中東部に広く分布する。(倉田, 1971) キヨスミツバツツジと分布が似ているが、住み分けして、混生しないようである。紀伊ではトサノミツバツツジ *R. decandrum* MAKINO ⁽²⁾ (雄しべが10本ある点が異なる)と接触して中間品を生ずる。

18. *Rhododendron kiyosumense* MAKINO, Journ. Jap. Bot. VI-8, 18, 1930. *R. Shimidzuenum* HONDA ex MAKINO & NEMOTO, Fl. Jap, ed. 1, 890, 1931.

R. dilatatum var. *kiyosumense* (MAKINO) HATUSIMA, in Sci. Rep. Yokosuka Mus, XV, 22 1969. キヨスミツバツツジ(牧野) ⁽³⁾ スルガミツバツツジ(本田, ex 牧野, 根本, 1931) ⁽⁴⁾ ミヤマツツジ(方言, 総称)

花や果実のない標本で、枝や葉だけではミツバツツジとよく似ている。しかし花梗の基部と萼辺縁に粗毛があること、子房に毛が密生すること、雄しべが10本ある点で区別できる。またコバノミツバツツジによく似ているが、葉柄や葉裏の中肋に始め毛がなく、花梗は基部を除き、また萼の辺縁を除き無毛の点が違う。花期4月。

静岡県の産地: 伊豆では西半分の低山地に生ずる。駿遠では低山から深山の標高約1,000mに達する。

(1) ミツバツツジの名は本種1種の名であるが、人により、この類の総称に用いることがある。

(2) MAKINO, J. J. B. 1-6, 21, 1917. 静岡県に無い。

(3) キヨズミツバツツジのタイプは東大演習林の鈴木治太郎が1929年千葉県清澄山で採集したものである。標本は牧野標本館にある。

(4) スルガミツバツツジとは清水伝吉氏と筆者が1930年藤枝市瀬戸谷松峠で採集したものである。標本は東京大学理学部にある。

東駿では愛鷹山のみにもみる。西駿では大日峠や竜爪山に及び、遠江では少いが深山から低山に及ぶ。

種の分布：本州の中部の太平洋側の特産。(原, 金井, 1960) 上総, 安房, 相模, 駿河, 遠江, 甲斐の南端部, 志摩, 伊勢, 紀伊(倉田, 1960)に分布する。

花期 4 月。

19. *Rhododendron reticulatum* D. DON ex G. DON, Gen. Syst. III, 846, 1834.

R. rhombicum MIQUEL, Ann. Mus. Lugd.-Batav. II, 164, 1866, pro parte.

コバナミツバツツジ(松村, 1889), ミヤマツツジ(方言, 混称)

本種はミツバツツジとキヨスミツバツツジによく似ている。はじめ葉柄と葉に毛があること, 花梗と萼は明かに毛があること, 雄しべ10本~(7本)⁽¹⁾ あること, 子房は密生毛あること, 花柱は無毛か少毛あれど腺毛がないことが特徴。花柱の有毛のものをナキソミツバツツジ f. *trichophyllum* MIZUSHIMA⁽²⁾ というが, 実際は花柱無毛のものと有毛のものとが混生することが多く, 区別しない方がよいと思う。

静岡県産地：大井川以東に見ない。遠江では八高山, 本宮山, 獅子鼻, 小笠山, 天竜川以西では台地に多く湖西山脈一帯に散在する。小笠山で花柱有毛品と無毛品と混生する。

種の分布：日本南部に分布。南信, 遠江以西, 近畿, 中国, 四国, 対馬, 九州と広く分布して, 葉の毛の多少や大小など変異が多い。

(a) f. *albiflorum* (MAKINO) MAKINO, Ill. Fl. Nipp. 253, in textu, 1940. シロバナコバナミツバツツジ(牧野, 根本, 1925)。

純白色の花を持つ一形, 静岡県では引佐郡細江町で確認することができた。四国と近畿に知られているが, 極めて稀品である。

20. *Rhododendron Wadanum* MAKINO, Journ. Jap. Bot. I-6, 21, 1917.

R. glandulistylum KOMATSU, Bol. Mag. Tokyo. XXX 11, (10), 1918, cum diag. jap.

R. reticulatum D. DON var. *Wadanum* (MAK.) HATUSIMA, Sci. Rep. Yokosuka Mus. XV. 22, 1969.

トウゴクミツバツツジ(牧野, 1917), ダテナミツバツツジ(小松, 1918), ミヤマツツジ(方言, 混称) 葉形や花はコバナミツバツツジに似ている。しかし葉柄と葉の下面の中肋の基部に密生毛を有し, この毛は生品では淡黄白色であるが標本にすると褐色となる。花柱は腺毛をもち粘る点の特徴である。

静岡県産地：ブナ帯に広く分布している。標高700~1,500mの間に多い。伊豆では天城山の上部, 東駿河では箱根山, 富士山, 愛鷹山, 毛無山脈(天子岳から毛無山まで)に多い。西駿河では竜爪山, 大日峠あたりから以北の南アルプス地域に広く及ぶ。遠江では北半の山脈一帯に及ぶ。

種の分布：本州の外帯に広く分布し⁽³⁾, 陸前, 磐城, 関東(千葉県を除く), 東海道, 中央道, 近畿の北東(近江, 伊勢御在所岳⁽⁴⁾)にわたる。

トウゴクミツバツツジの代換の種類はダイセンミツバツツジ var. *lagopus* (NAKAI) HARA, En. Sp-erm, Jap. I, 56, 1948 で, 本州日本海側から西本州へかけて生ずる。

(a) f. *leucanthum* (MAKINO) HARA, Enum. Sp-erm. Jap. 156, 1948.

シロバナトウゴクミツバツツジ(牧野, 1926) 花が白色の一型。静岡県では愛鷹山で1926年横山真平氏が採集した。

その外に半八重咲化した畸形は御殿場市域で同市の渡辺健二氏が採集した生株を確認することができた。

(1) 北村四郎博士が京大学生の時に筆者宅へ御出になって, コバナミツバツツジは雄蕊10本と本には書いてあるが, 7本まで減じたものがあると御話になった。

(2) MIZUSHIMA, in Journ. Jap. Bot. XXXVI-3, 93, 1961. 木曾山口村が基準産地。

(3) 原, 金井(1958)

(4) 牧野標本館標本(村田吉太郎 1925)

21. *Rhododendron amagianum* MAKINO, Journ. Jap. Bot. VII-8, 21, 1931, pro syn,

R. Weyrichii Maxim. var. *amagianum* (MAK.) HATUSIMA, J. c. 23, 1969.

アマギツツジ (牧野, 1931)⁽¹⁾

高さ 5 m に達する落葉低木で、枝は粗大である。葉は枝先に 3 枚づつ輪生するが、更に小形 1 枚を加えることがある。葉柄と葉裏中肋の基部に長軟毛（幼時淡黄色で乾くと黄褐色に変色する）を密生する。葉は広三角ひし形で基脚は急にえぐった様になって広楔状に尖る、表面に長軟毛が伏し、光沢がある。花は芽中 2 ～ 4 づつ着き、朱赤色漏斗状で、径約 6 cm、雄しべ 10 本、花柱に毛がある。花期は 6 月、おくれたときは 7 月上旬まで。

本種は前記のミツバツツジ、キョスミツバツツジ、コバノミツバツツジ、およびトウゴクミツバツツジの 4 種とは大分違い、葉が 3 枚づつ輪生する点を除いて、その他の性質から、ジングウツツジと共にオンツツジ *R. Weyrichii* MAXIM. に類縁がある。

静岡県産地：伊豆半島固有。天城山から遠笠山にかけて尾根通りにかなり多く生えている。中伊豆町方面へは低下してカシ帯まで降下したのが見られる。日金山、葦山町と多賀の間の尾根、達磨山にも僅か生えている。

種の分布：フォッサマグナ要素の一つで、分布区域が伊豆半島に限られている。

22. *Rhododendron sanctum* NAKAI, Bot. Mag. Tok. XLVI, 630, 1932.

R. sanctum var. *lasiogynum* NAKAI ex HARA, Enum. Sperm. Jap. 1, 52, 1948,

R. Weyrichii MAXIM. var. *sanctum* HATUSIMA, l. c. 23, 1969.

ジングウツツジシ (中井,)⁽²⁾ シブカワツツジ (遠江方言),⁽³⁾ キンザンツツジ (同)⁽⁴⁾

本種はオンツツジ *R. weyrichii* MAXIM. に似ているが、それより更にアマギツツジによく似ている。ただ花がピンク色の点異なる。

樹高 5 m に達し、幹は通常 3 ～ 5 本づつ束生する。葉形は全くアマギツツジと同じである。花はピンク色で毎芽 3 ～ 4 花づつ出る。花柱無毛品と有毛品と同所に混生するので学名で区別できないようである。花期 5 月末～ 6 月。

静岡県産地：天竜川以西の低山の蛇紋岩地帯の引佐町・渋川から天竜市熊に掛けて多数群生する。マキ、ネジキ、イヌツゲ、キハギ、マンサクなどが混生する。

種の分布：愛知県（三河国）東部と三重県（伊勢神宮付近、志摩）など伊勢湾周辺の蛇紋岩地帯の固有種。伊勢湾周辺にキク科のアザミ属 *Cirsium* 数種が固有のことは既に指摘されている（北村, 1934）が、本種も同地域に産する蛇紋岩という特殊環境に由来し、シマジタムラソウ（シソ科）、シブカワニンジン（キキョウ科）およびシブカワシロギク（キク科）とともに地理学上の特殊要素である。

(a) f. *albiflorum* SUGIMOTO, Act. Phyto-Geob. XVII, 128, 1958.

シロバナジングウツツジ (杉本)

花の白色品で、遠江引佐町・渋川に稀生していたが、誰かに持ち去られたという。

(付 1). *Rhododendron* × *Tatuoi* NAKAI ex HARA, Enum. Sperm. Jap. 1, 54, 1948.

R. dilatatum × *R. Wadanum*

ムサシミツバツツジ (中井 ex 原, 1948)。トウゴクミツバツツジとミツバツツジとの自然間種、ミツバツ

(1) 昭和 6 年 (1931) 9 月 27 日牧野博士が伊豆湯島小学校の標本を鑑定中に同校教員が同年採集した標本を基に命名した。筆者も同行して立会った。同年 6 月中井博士は学生を引卒して天城山に行き本種を採集した。

(2) 和名は伊勢神宮の裏山で発見されたので神宮に因む。

(3) シブカワとは遠江引佐町・渋川温泉に多いからで、中井博士は花柱有毛品の名としたが、同所に無毛品と混生する。

(4) キンザンとは同温泉近く金鉾を試掘したことで名づく。

ツジに比して花は雄しべ10本ありて、子房は上半だけ有毛、葉と若枝と葉柄とに粗毛がある。

静岡県の産地：安倍峠の梅ヶ島温泉登山口で採集した。

県外の分布：武蔵伊豆岳（佐藤達夫，1935）が知られている。

Subgen. *Azaleastrum* PLANCH. バイカツツジ亜属

この亜属の特徴は花芽が枝に側生する。

この亜属は著しく異ったものを含んでいる。日本のバイカツツジは花が幅形で、雄しべ10本、葉は一年生で縁に細歯牙がある。北米産の *R. albiflorum* HOOK. は葉は一年生で全辺、花は漏斗状である。⁽¹⁾ 中国産の *R. ovatum* PLANCH. は常緑木で葉に細歯牙をもち、花は漏斗形。⁽²⁾

23. *Rhododendron semibarbatum* MAXIM. Bull. Acad. St.-Pet. XV: 229, 1870.

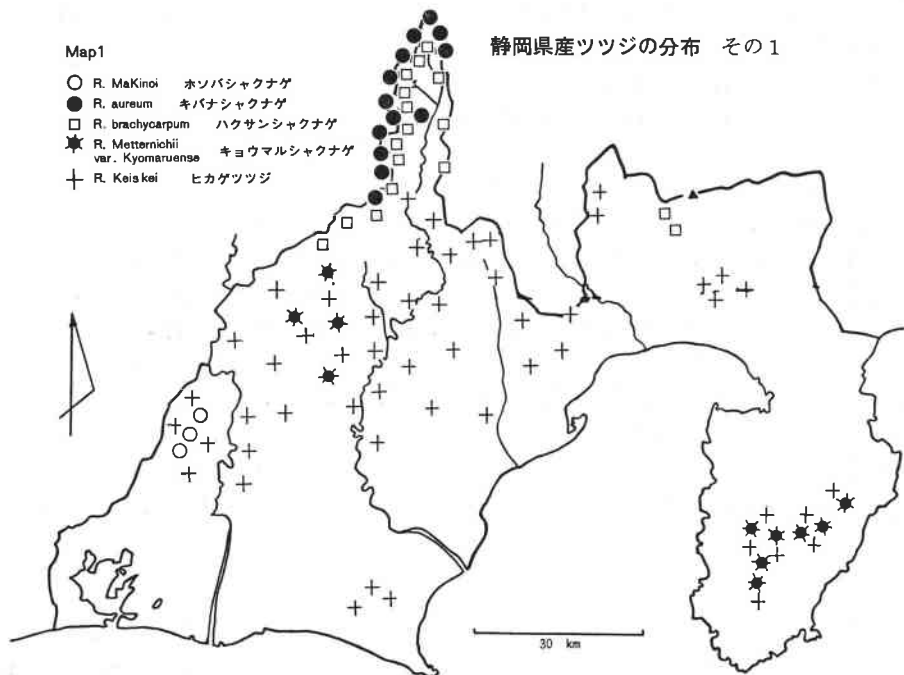
Azaleastrum semibarbatum (MAXIM.) MAKINO, Bot. Mag. Tok. XX VIII: 338, 1914.

バイカツツジ（牧野，1914），サミダレツツジ（岩崎，1828）

落葉低木、高さ2mに達する。小枝に白毛と腺毛がある。葉は枝先に集りつくが互生である。辺に鋸歯があり、下面は無粉白から多少粉白のものまで変異がある。花芽は二年生の枝の側に生じる点で他種と異なる。花は幅形で、淡桃色をおび、しばしば白色のものがある。雄蕊5本、上方へ2本と下方へ3本とが開く。果実は球形で腺毛がある。花期6～8月。葉の伸びた後である。

静岡県の産地：駿河と遠江の山野に生えてあまり多くない。富士山地方ではまだ筆者は見えていないが、伊豆（中伊豆町）に報告（林，1952）がある。

種の分布：日本固有、北海道（渡島南端）、本州（多く外帯に分布し）、四国、九州（霧島山以北）に産す。

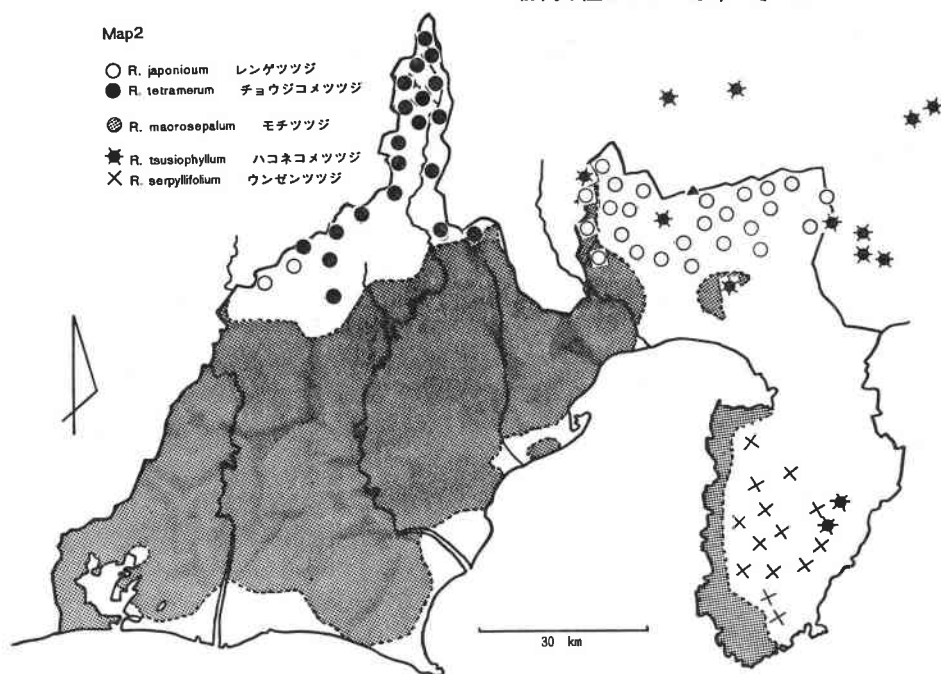


(1) 筆者は米国カリフォルニアの山中で見た。

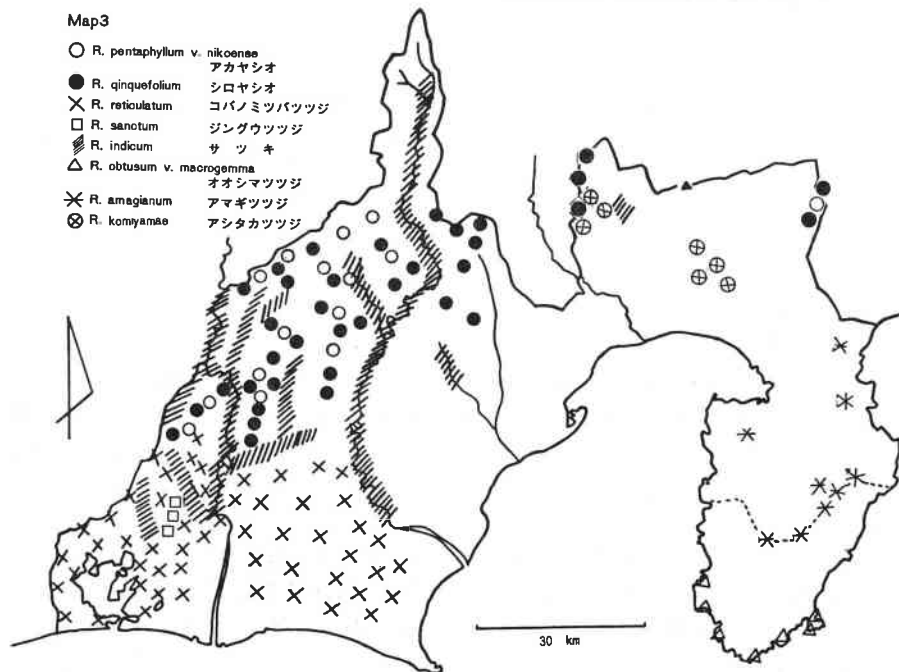
(2) 牧野標本館に *R. ovatum* PLANCH. に該当すると思われる標本がある。江蘇、広西、湖北、湖南、雲南および福建の各省に分布する。

(3) 堀田，1974. (4) 前川，1949.

静岡県産ツツジの分布 その2



静岡県産ツツジの分布 その3



分布型による種の区分

静岡県産ツツジ属の種をその分布によって次の要素に区分することができる。

A 寒冷地要素

東北アジア要素 キバナシャクナゲ

北日本要素 ハクサンシャクナゲ

本州中部亜高山要素 チョウジコメツツジ

B 日本普遍固有要素

ヤマツツジ, レンゲツツジ, パイカツツジ

C 日本外帯要素⁽³⁾

ソハヤキ要素⁽⁴⁾ サツキ, モチツツジ, ウンゼンツツジ, アカヤシオ, コバノミツバツツジ

本州四国外帯要素 ゴヨウツツジ

本州東南要素 ミツバツツジ, キヨスミミツバツツジ,

東海道中部要素 キョウマルシャクナゲ

東海道西部要素 ホソバシャクナゲ

伊勢湾周辺蛇紋岩地域要素⁽¹⁾ ジングウツツジ

D フォッサマグナ要素⁽²⁾

火山温帯要素 ハコネコメツツジ

七島要素 オオシマツツジ

富士山周辺要素 アシタカツツジ

伊豆半島固有要素 アマギツツジ

以上の如く静岡県の分布要素は多方面に互って居り、その中で日本外帯要素とフォッサマグナ要素が大半を占め、その内でも狭域に固有のものがある点は注目したい。オオヤマツツジは雑種性のものと思われるので植物地理上の問題から外される。

保護の問題

ツツジ属は花が美しいので、庭木盆栽活花など利用上重要な花木であるが、乱採や開発の犠牲となるものが多い。静岡県には上記の如き学術上貴重な種類に富み、しかも所産の区域が狭くて数量においても稀少のものが少なくない。

ツツジ属(シャクナゲの類を含めて)は他の樹木と比べると、環境に対する条件がデリケートで、しかも種類ごとに特殊の環境(気候、地質など)的個性が強い。従って山野に自生するものを掘取って移植しても、長く活着するものは少ない。あるものは一時仮活着して、生きた状態のように見えても、二年目から花を着けなくなったり、数年生きていても枯れてしまうものが多いのである。

しかしツツジ属の中で昔から園芸植物として普及し市販されている一群の品種がある。サツキ、クリシマツツジ、リュウキユウツツジ、オオムラサキツツジなどは改善された美しい品種が著しく多く出ている。静岡県の花だからといって、野生のツツジ類を採ることは止めて、市販の苗の方が良いから、市販品を植えて楽しんで頂きたい。「親木を残せば小苗を採っても良いだろう」と思う人があるが、親木の命には限りがあるから、後つぎの小苗を残すことこそ大事であると思う。天城山あたりで、小苗を採って売るプロの業者があるが、今後は禁止して頂きたい。

幸に本県西部のジングウツツジと、ホソバシャクナゲの産地は県の天然記念物に指定され、また京丸の牡丹の伝説で名高い岩岳山のツツジ類も国で天然記念物の指定になった。しかし天城山のシャクナゲについては天然記念物の指定申請まで大そう苦心して、やっと申請書を出した後に何者かの為に書類紛失という悪質

(1) 北村, 1950.

(2) 前川, 1949.

妨害に遇ったが、それに屈せず、今後も保存の為に努力したいと思う。保護について当局だけに頼らず、国民全体の責任で監視して守りたい。

おわりに臨み、ツツジ属の研究について多くの方々に多大の御援助頂いた。ある時は採集旅行に、ある時は標本や苗を頂いたり拝見させて頂いたり、或は産地や分布の御教えを頂いたり、御芳名は省略するが厚く感謝申上げる。東京都立大学牧野標本館のツツジ属標本(約5千点)の閲覧を許された故水島正美博士に深く御礼申上げる。また本稿を草するに当って御懇篤の御助言を頂いた静岡大学理学部の近田文弘先生に厚く御礼申上げる。

Summary

In this paper, the taxonomical characteristics and distribution of all twenty-three species (including six varieties) of the genus *Rhododendron* hitherto reported in Shizuoka Prefecture are mentioned and these species are grouped into four geographical elements based on their distribution patterns.

引用文献

- HARA, H. 1948. *Rhododendron in Japan*, *Rhododendron Year Book*, **III**: 112~127. London.
- 原 寛 1948. 日本種子植物集覧 **I**: 26~63. 岩波書店, 東京.
- 原 寛, 金井弘夫 1958. 日本種子植物分布図集 **I**: map. 39~42. 井上書店, 東京.
- 1959. 同 **II**: map. 175. 同.
- 初島彦彦 1971. 琉球植物誌 460~462, 沖縄.
- 1969. 日本産ツクシアカツツジ節の再検, 横須賀市博物館研究報告 **15**: 17~23.
- 林 弥栄 1952. 天城山国有林の森林植物, 林業試験所集報 **63**: 50.
- 堀田 満 1972. 植物の分布と分化, 三省堂, 東京.
- 北村四郎 1934. 東亜産アザミの分類及び分布, 植物分類地理 **III**: 1, 12.
- , 村田 源 1971. 原色日本植物図鑑・木本編・**I**: 147~176, 保育社, 大阪.
- KITAMURA, S. 1972. 原色日本植物図鑑・木本編・**I** に発表した新名及び新知見, 植物分類地理, **IIV**: 37~38.
- 北村四郎 1950. 蛇紋岩地帯の適応と隔離, 同, **XII**: 178.
- 小松春三 1917~18. 日本産ツツジ編, 植雑**XXXI**: 271~273; **XXXII**: 1~22, 31~46.
- 倉田 悟 1960. 紀伊半島のキョスミツバツツジ・北陸の植物, **IX**: 2. 49.
- 1971. 原色日本林業樹木図鑑, **III**: p1. 222~231. 地球出版, 東京.
- 1973. 同, **IV**: p1. 35~38. 同.
- KOIDZUMI, G. 1930. *Florae Symbolae Orientali-Asiaticae*, 73. Kyoto.
- 前川文夫 1949. 日本植物区系の基礎としてのマキネシア, 植研, **XXIV**: 91.
- 牧野富太郎 1896. シャクナゲ2種の記, 植雑**X**: 212.
- 1924. 謂ゆる京丸の牡丹: 科学知識 **IX**: 6. 625.
- 1940. 牧野日本植物図鑑 249~257, 北隆館, 東京.
- MAKINO, T. 1909~10. *Observ. Fl. Jap., Bot. Mag. Tokyo*, **XXIII**: 251; **XXIV**: 99.
- 1917. *Contrib. Knowledge Fl. Jap. Journ, Jap. Bot.*, **I**: 6, 21.
- 1926. *ibid.* **III**: 17.
- 1928. *ibid.* **V**: phot.
- 1930. *ibid.* **VI**: 18.
- 1931. *ibid.* **VII**: 21.

- 牧野富太郎, 塚本 莞 爾 1914. 日本植物乾腊標本目錄, 東京帝室博物館, 東京.
——— 1925. 日本植物總覽 (1 版), 411~426, 春陽堂, 東京.
——— 1931. 同 (改訂増補), 873~893. 同.
牧野富太郎, 前川文夫, 原寛, 津山尚 1961. 牧野新日本植物図鑑, 453~461. 北隆館, 東京.
松村 任三 1912. Index Plantarum Japonicarum II-B, (帝国植物名鑑, 後編), Maruzen, Tokyo.
MAXIMOWICZ, C. J. 1870. Rhododendreae Asiae Orientalis, Mem. Acad. Sci. St. XVI: 9.
中井猛之進 1922. 大日本樹木誌 I (1 版) 29~118. 成美堂, 東京.
——— 1927. 同 I (改訂) 37~164.f.16~78, 同, 同.
NAKAI, T. 1924. Abstract from Nakai Trees and Shrubs Jap. I with Additional Remarks on Some Species, Bot. Mag. Tokyo, XXXVIII: 28.
——— 1926. Notulae ad Plantas Japoniae et Koreanae, ibid. XL: 483~508.
——— 1932. ibid. XLVI: 630.
——— 1949. Mischel. Notes on Jap. Pl., Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo, XXVII: 33.
OHWI, J. 1953. New Names and New Combinations adopted in my "Flora of Japan", ibid. XXXIII: 81.
大井次三郎 1953. 日本植物誌 (1 版) 883~896, 至文堂, 東京.
——— 1965. 同 (改訂新版) 1020~1034, 同, 同.
REHDER, A. 1937. Manual Cultivated Trees & Shrubs, USA.
白井光太郎 1933. 樹木和名考, 内田老鶴園, 東京.
杉本 順一 1936. 日本樹木総検索表, 三省堂, 東京.
——— 1961. 日本樹木総検索誌, 369~382, 六月社, 大阪.
——— 1965. 同, 改訂版, 369~475. 同.
——— 1962. 伊豆の植物, 東京営林局緑友会, 東京.
——— 1962. 静岡県愛鷹山植物目録, 吉原市役所, 吉原市.
——— 1964. 長野県植物目録 (18). 長野林友 1965: 1, 40, 長野営林局互助会, 長野.
——— 1967. 静岡県種子植物目録, 静岡県生物研究会編, 静岡県植物誌, 静岡.
——— 1972. 新日本樹木総検索誌, 369~386, 509~610, 井上書店, 東京.
——— 1956. 植物雑記 (ハコネコメツツジ), 植研, XXXI: 264.
——— 1973. 遠江のホソバシャクナゲの自生地; 植物採集ニュース, 70, 100.
SUGIMOTO, J. 1975. Notes on Flora of Japan. Journ of Geobot. XXII: 4, 50~53.
高橋 秀男 1975. チョウジコメツツジについて, 神奈川県立博研報, 自然科学 VIII: 107~118.
植松 春雄 1959. 山梨の植物, 230, 地方書院, 東京.
渡辺 定元 1950. アシタカツツジの雄蕊の数について, 植研 XXXIV: 5. 159.
WILSON, E. H. 1921. Monograph of Azaleas, Publ. Arn. Arb. IX-1.
山中 二男, 竹崎 恵子 1959. キシツツジの分布と生態, 植研 XXXIV: 215.
山崎 敬 1969. シャクナゲとツツジの呼び方について, 植研 XLIV: 12, 30.
山崎 敬, 山崎富佐子 1966. モチツツジの園芸品, 同 XLIV: 12, 282.